

春期福音特別集会 キリスト道講演会 生命の泉

1980年6月8日（京大会館）

奥田昌道

小池先生との出逢い 聖霊のバプテスマ 行き詰まりの時の助けの力 サマリヤの女との対話 人生の大事な瞬間 文化文明とは次元がちがう 働くことが祈り 永遠の生命の水 足を洗う 十字架の蔭に泉湧きて 詩篇36篇9節「生命の泉」 我キリストと偕に十字架せられたり 永遠の生命をいただく

●小池先生との出逢い

皆さんよくいらつしやいました。私は大学では、民法の教授ということになっていきますけれども、ここではそういうことではなくて、本当に一人のキリスト者、キリストのものという立場でお話をさせていただと思います。

実は昨日6月7日から小池先生をお迎えいたしましたして、京都の方はご存知だと思いますけれども、鴨川の丸太町の橋の少し北に「大和屋旅館」という非常に古い——なにか明治の頃の志士の斬り合いの傷痕が柱に残っているという——曰くつきの旅館がございますが、そこを借り切りまして、60名ばかりの者が集まって、午後4時から今日の午前の11時頃まで3回、夕方と晩、また朝は実は御所へ、6時半から出掛けまして、祈禱会をやりましてそれから9時半から第3回の集会をやつて11時に切り上げるということで、ここに臨んできました。

私は先生に出逢いましたのは、今からちょうど20年前になります。それは1959年11月8日ということで、11月9日に「楽友会館」という所でエマ才会主催の講演会をいたしました。それまで私は小池先生という方を全然知らなかった。ある方をおして先生のことを聞いて、先生も「京大で話したい」ということを言つてらつしやるということを聞きましてので、お迎えに行つたのは京都駅で、知らないから幟のぼりでも立てようかと思つた。そんなことで8日にお会いして、9日に講演会をしていただいた。その時の題が「無的実存」という。先生は『無者キリスト』（小池辰雄著作集第一巻、1975年刊）という本を出しておられますけれども、「無的実存」という題で、本当に私はそれに触れて、

「これが本当の——宗教と言うなら——宗教だ。これはキリスト教ではない」

と思いました。やはり私がそれまでに接していた、視野の狭い、何か一つの宗教でこれを金科玉条に守つて、ことごときに罪を赦していただいて、「私は一生、罪びとです」と言つて頭をうなだれて、そしてまあ何とか大過なくこの世を過ぐすといったものではなくて、本



当に生命のあふれるような、また自由があった。何にも囚われておられない。そういう姿に打たれて、私はそれから小池先生のとりこに——とりこと言うか、小池先生をとおして働いておられるキリストのとりこになりました。それから20年です。

●聖霊のバプテスマ

私はその間、いろいろ悩んだことがあります。先生が告白しておられる次元が高すぎてついていけないですね。

「もう私はだめではないか。あんなのとは一緒にやれない」

と、何遍思ったか知れない。けれども、その時に私を支えたのは何かといいますと、先生はいつも

「私は聖霊のバプテスマを受けてからガラッと変わった」

と言われた。聖霊を受けるまでは無教会の信仰だった。一生懸命にまじめに——あの「富める青年」のように、まじめにまじめに一回も集会を休まないで、学生時代に藤井武先生の集会に5年通ったと。それから先生が亡くなられてからあとも、自分で日曜日を守ってずっとやってきた。ところが何か欠けている。

「何だろう？ 何だろう？ と思っている時に、祈りだということに気がついた」

と先生は仰る。それから、1950年11月3日に、九州の手島郁郎という方と祈りの集会をなさった。そこで果然、聖霊のバプテスマを受けられました。それで本当に使徒たちの次元に目が覚めた。熊本から帰られる汽車の中で、聖書を開くと聖書の文字が躍動しているという。「聖霊、聖霊」というのがボンボン、ボンボン響いてくる。そういうことを告白されました。

それから実に先生を通して不思議なことが起こった。病める人の前で語っていると、いつの間にか病める人が癒されてしまうとか、不思議なことがいろいろ起こった。逆にそのことで、先生を白眼視する人たちが出てきました。「異端である」と言う。先生はそういう戦いの中を、

「ただ主イエス・キリストのみ。御霊のキリストのみ」

と言って歩いてこられた。私はそれを20年間ずうつと見てきました。

私が行き詰まったり、「もうついて行けない」と思った時も、いつも私に一つのまだ可能性が残っていた。それは、私も聖霊を受けたら、先生の言ってらっしゃることがわかる。私はまだ聖霊を受けていない。信仰はいただいたけれども、まだ聖霊を受けていない。聖霊をいただいたら、先生の次元がわかると。それだけを一縷の望みにして私は——歯を食いしばってと言いましょかね——来たんです。10年くらいです。1968年くらいでしゅうか、あの鹿沢温泉の山の中の鄙^{ひな}びた旅館で夏の特別集会がございました。その頃から何かしらひとつ吹っ切れものが出てきた。



「もう、どうでもいいや。私ではないんだ。自分の信仰だとか、自分の立派さだとか、自分の熱心とか、そういうものではない。キリストが本ものならば、私を捕まえて引っくり返りして、御業^{みわざ}をなさるはずだ」

と、何かそういうふうな思いが湧いてきまして、その頃から少しずつ、だんだん楽になってきまして、1972年から私は京都で小さな集まりを独立で持つことになりました。家内とたった二人でその頃は始めましたけれども、今はたくさんの方が集会に集まっておりますが。大学で「エマ公会」を始めましたのが、1957年から始めておりますけれども、やはりだんだんと時が経つにつれまして、そちらも楽になってきましたし、語るのが楽しいような、そういうことでまいりました。

私は、いつ聖霊を受けたのかわからないんです、実は。本当に先生のようにガラリと変わるのか、パウロのようにガラリと変わるとか、そういう体験がないものですから、私はわからないんですけれども、何か知らないけれども、だんだん楽になってきまして、「自分ではない」ということが本当にわかりました。

●行き詰まりの時の助けの力

私はいつも行き詰まりますと——大学というのはひどい所なんですよ、この頃は——昔は大学の教授というと、夏休みはたくさんあるし、授業も少ないし、研究だけしておればいい。授業なんかなんぼ休講したって、学生は「ああ、先生は研究しているんだな」と言っていて喜んでいような所であつたらしいですが。今は、大変な所です。そういう所で私のような出来の悪い者が賢い先生方の中でやっていくのは大変なことなんです、申し訳ありませんけれども。本当に大変な所なんです。そこで私はいつも負い目を持っています。私のような者に教えてもらう学生は気の毒だなと思って、もっと素晴らしい聡明な先生に教えてもらえばいいのにといい負い目はいつもあります。

今から10年前の大学紛争の頃に、私は一時、聖書の会をやめたことがある。まともに授業をできない人間が聖書の会なんて開く資格はないと思つて、やめたことがある。でも、また再開しました。聖書を喰らうこと、聖書を読むこと、これは私の生命^{いのち}である。どんな出来損ないでも、どんなに人から責められるような無資格者であっても、生きることだけは神さまは赦してくださいさる。私にとつてこの聖書は、言葉は霊の糧である、生命である。そう思ひましてまたやりだしました。

私はしばしば法学とこの信仰というものがどうしたら両立するかと悩みました。法哲学をやっているわけでもありませんし、非常に日常的な民法という、一番生活に密着しているところをやっています。法律相談もやっています。いろんなところで現実にあつちかいます。そんなところへ、また我々の学問の中へ、直接にこのキリストの福音が入ってくるわけはありません。法哲学であるとか、あるいは神学であるとか、そういったところであるな



らば、あるいは学問と信仰とがもつと直結するのもわかりませんが、そうではない。いくたびも悩んだことがあります。しかし、私は、人が人であるかぎり、神の言葉によつて生きる、神の霊によつて生きる、それだけでいいじゃないかと。私が生きているということは、神さまの霊が、キリストの霊が私を貫いて生かしてくださっている。生きていることがその証である。それでいいんだと。そういう気持ちであります。

正直、行き詰まったり、本当に倒れ伏すようなことになった時、肉体の力の限界を感じたような時、眠る時間がなかったり、講義の準備を午前2時、3時までして、朝一番の講義をしたりとか、そんなこともございました。その前夜に祈禱会をやつてまして、それが終わってから講義の準備をするとか、そんなことでかなりハードなんですけれども。そのたびに私はキリストに祈ります。

「主さま、あなたは私の生命です。あなたは私の力です」

と。そして祈りますと本当に力がくるんですね。だんだんそれが味わさしていただけのようになってきました。ですから、前はこんな講演会というと、足が震えていたんですよ、正直ね。だけど今は、「もうどうにでもなりやがれ」と思つてますので、神さま・キリストがなさつてくださるから。

今日も朝、6時半から御所の――今出川に近い御所の、グラウンドの向こうの木陰で、小雨がパラパラと降るなかで祈つていました。宿屋から出掛けます時に雨がちよつと降つてました。雨が降つたつて傘さして片手で祈れば、キリストは来てくださる。行こうではないかと言つて、皆を連れて行つた。物凄く恵まりました。

不思議にこの頃、私のような者とおしてでも、病んでいる人のために手を置いて祈りますと、癒されるんですね。そういうことが不思議に起こる。私には全然わかりません。私はただキリストの御力が働いてくださるようという一念をこめて、キリストに祈ります。そうすると、私が手を置いたら、そこが4日も5日も熱いと言う。そして骨の痛みが癒えたとか、そういったことを体験なさる方もあったりする。遠隔地で祈つておれば、向こうで病が軽くなつたりとか、そんなことがあつたりいたします。私は不思議でなりませんが、はつきりしてますことは、キリストが私ごとき者を捕まえて、そして私の中に流れこんで、そして御業をなさるということです。この先どういうふうになさっていくか知りませんが、それでも、楽しみですよね。

キリストは

「無条件でいい。何も条件は要らない」

と仰るんです。そのことをこれからこの「サマリヤの女」との会話のところで皆さんと一緒に味わいたいと思います。「生命の泉」です。



●サマリヤの女との対話

時は今から二千年前、ユダヤの地方の、「サマリヤのシカル」という町に、これから話に出てくる「ヤコブの井戸」があります。二千年前ですけれども、それがビデオテープに撮られて今、皆さんの前に上映されていると思つて、これを読んでください。これは目で読む絵本だと思つて読んでいただきたい。ヨハネ福音書第4章です。

「さて、イエスがヨハネよりも多くの弟子をつくり、洗礼を授けておられるということが、ファリサイ派の人々の耳に入った。イエスはそれを知ると、²——洗礼を授けていたのは、イエス御自身ではなく、弟子たちである——³ユダヤを去り、再びガリラヤへ行かれた。

南のユダヤからガリラヤへ行く。イエスがずっと過ぎられたのはガリラヤです。時々、エルサレムへ、ユダヤ地方へ来られたけれども、また帰られた。その途中に、どうしてもサマリヤという真ん中の地方を通らなければならなかった。

⁴しかし、サマリヤを通らねばならなかった。⁵それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、

イスラエルでは井戸というのは物凄く大事なものです。砂漠の民ですから井戸をめぐっている争いもありました。井戸は命の源なんです。旧約聖書では、アブラハムの時からイサク、ヤコブ、みな井戸にまつわる逸話^{いっわ}が、特に奥さんを娶るときに井戸をめぐつての逸話が出てきますから、創世記なんかをあとでご覧ください。モーセもまた井戸で美しい乙女たちに出逢い、そこで困つて女たちを助けた、その娘さんたちの家に宿つて、その娘を娶つて住みついたというようなことが出エジプト記に出てきます。そういった井戸をめぐつて羊飼いたちがいつも生活をしているわけです。その井戸です。

シカルというサマリヤの町に来られた。⁶そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、

小池先生は「私は疲れたことがない」と仰るんですけどもね、まあ「イエスさまも疲れた」と書いてあるから、皆さんはどうぞご安心ください。

そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。⁷サマリヤの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。⁸弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。⁹すると、サマリヤの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリヤの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリヤ人とは交際しないからである。

サマリヤ人は紀元前8世紀のバビロン捕囚のときにイスラエルに残った者と、アッシリヤ王が植民として送りこんだ異教徒との混血の子孫です。ユダヤではそういう混血人に対しては「穢れたる民である」と言つて偏見を持っていますから、ユダヤ人はサマリヤの人たちを蔑^{さげす}んでいます。そういう偏見を持っていました。そこで交際はしない。ところが、



このユダヤ人であるイエスがサマリヤの女に

「水を飲ませておくれ」

と声をかけられた。国交を開かれたわけですね、大きく言えば。手を差し伸べられた。それでこのサマリヤの女はびつくりした。実はこのサマリヤの女は少々身持ちがわるくて、五人の夫がいたけれども、それももう今どこへ行っているのかわからないという、身持ちがわるい。だいたいお昼の12時頃に水を汲みにくるといのは怠け者なんです。他の皆はもつと朝早く起きて水を汲んである。それが今頃のこの起きて、一人水汲みにやって来た。まあ落第生ですね。そういう身持ちのわるい、しかも落第生のような女に対して、イエスは親しげに「水をくれ」と言われた。それで怪訝^{けげん}に思ったこの女は、

「ユダヤ人のあなたがサマリヤの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」

と訝^{いぶか}って言った。

10 イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」

とんでもないことをこの人は言い出した。

11 女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、

「主よ」というのは、目上の人に対して使う言葉です。なにも「神さま」とか、そういう意味ではない。「だんなさま」というような意味です。

井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12 あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。13 イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14 しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15 女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください。」

問答がトンチンカンなんですね。キリストが仰ったのは、

「霊の水、死んでも死なない永遠の生命の水、霊水をやるよ。」「この井戸水は、なるほどヤコブもまたその子孫たちもそれで命を養ってきた、大事な井戸だ。命懸けで守るべき井戸だ。しかし、私が与えようとしている水はそれよりももつと素晴らしいんだよ」

と、そう仰ったけれども、この女はわからない。

「渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、その水をください」



と。これは怠け者の答えですよ。

「もう、のこのこと12時に水を汲みに来なくなつていい。これは助かった。こんないい水をもらつたら、自分はもうバンザイだ」

とこの女は言ってます。次元がちがいますから、

「あんたでは話にならない。夫を呼んできなさい」

とキリストは言われます。

●人生の大事な瞬間

ここまでのところで非常に大事なことがくみとれると思う。この女の人は、身持ちのわるくて怠け者だ。おそらく人々からは爪弾きされ、白眼視されているような人かもしれない。しかも、その人が何の予知もなく、お昼の12時にこの井戸の水を汲みに来た。そこにイエスが旅に疲れて坐つておられた。「水をくれ」と言われた。

ここに全く予期せずして、彼女は実は神さまに会つていらっしゃるんですね。全く予期せずして、神さまのほうからイエスという方をおして、この女に近づいて来られた。神さまのほうから声をかけて、道を拓かれた。

対話というのは大事ですよ。何かひとこと声をかける、

「いい天気ですね。ご精が出ますね」

と。そしたら心が開ける。そして話しているうちに、語り手の大事なものが流れ出ていく。そういう場面がこれですね。全く偶然としか言うほかありませんが、これが神さまの摂理です。神さまのほうで予定なさつて、ご用意なさつて、この女にと思われたんでしょう。

よく小池先生が仰つたんです、

「人生には大事な瞬間があるよ」

と。先生が講演会をなさつたり、集会をなさつたりする時に先生は、

「万難を排して来い。語るのは自分ではない。自分の中に神さまが働いて皆さんに語りかけられるのだから。神さまが出会おうとして、皆さんをつかもうとしておられるのだから、出てきなさいよ」

と言われる。「一切を棄ておきて」と、よく聖書に出ていますね。弟子たちは「私に従え」と言われたら、「一切を棄ておきて従えり」という。そういう従い方を先生は求められるんです。私はその気持ちが本当にわかります。

「物凄い素晴らしいものが今差し出されようとしている。他の何ものにも代えられない。そういう人生の大事な瞬間をつかんだ人は人生の勝利者である」

と、先生は仰いました。



●文化文明とは次元がちがう

この女が言っていることが面白いんですね。キリストに対して、

「あなたは汲む物を持つていません。井戸は深いんですよ。ヤコブよりあなたは偉いんですか？」

と。確かにイエスは見すばらしく見えたのかもしれませんが。イエスといえども、30メートルの——あるいは20メートルか知れませんが——その深い井戸につるべもなく、水を汲むことはできないでしょうと。

私はこの問答の中に、この世の文化・文明といったものの一つの徴のようなものを見られます。我々キリスト者に対して、キリストに対して、

「あなたは、こんなことはできないでしょう。あなたは素手でしょう。新幹線を走らせることはできないでしょう」

と。今は文明・文化が物凄く進んでいますから、そういうものの——何と言いましようか、絢爛豪華——そういうことに対して、キリスト者は本当に素手です、無手です。ですから、何もできないですね。また哲学、その他いろいろ人文のほうでも、まずキリスト教といえば、否定してかかります。歴史もその他学問もみなキリスト教に敵対いたします。

「あなたは水を汲む物を持つてないでしょう。こっちのほうが、先祖ヤコブのほうが偉いんですよ。そうじゃないですか？」

と訊いてます。ところが、実はどっこい、キリストはその上手を行かれた。

「なるほど私は今、この井戸の水を汲んであげることができない。今、パンをすぐと与えることはできない。今すぐあなたが求めている、この地上で一番欲しいもの、お金あるいはその他いろいろ、それをすぐに魔術師のように差し出すことはできない。けれども、私が与えようとしているものは次元がちがう。この水を飲む人はまた渴く。しかし、私が与える水を飲む人は永遠に渴くことがない。私が与える水はその人の中で湧き出て、永遠の生命に至る水の泉となるんだよ」

と。これがキリストが実は私たちに差し出してくださっているものです。確かにこの井戸の水なくしては、ヤコブも子孫も羊たちも生きてこれなかった。掛け替えのない大事な水なんです。それをイエス様はなにも否定なさっていない。

「そうだよ。だけど、それだけでは人間はだめなんだ、また渴くんだ。井戸の水はいつか涸れ果てる。あなたの命もいつかは終りがくるんだよ。終りがくる、しかし尊い命です。それを養ってくれるこの水は尊い。しかし、その水に養われながら、それを通して奥に、永遠の生命の水を飲まなかったら、この人生は空しい」と、キリストは言っておられる。



●働くことが祈り

ここを間違わないでほしいんです。よく「宗教」と言いますと、なにか

「宗教は祈り三昧さんまいでこの世のことはどうでもいい」

というふに、

「もう水を汲みに来なくてもいいように、その渴くことの無い水をください」

と、怠け者をつくるように、あるいはこの世の事に全く無関心で、何も積極的なものを持たない。ただ彼岸に憧れてその日を待っている。そういう怠け者を作り出す阿片あへんのように誤解している人があります。そうではない。この生命の水がきたら、本当に積極的にこの地上での仕事に打ち込むことができます。

「何の憂いもなく、明日死ぬ身であつても、私は今日一日の命を神に在って燃焼す

る。そうしたら、それは永遠だ」

と、そういう確信が湧いてくるんです。よく小池先生は、

「非連続の連続」

と仰る。

「明日があると思うな。今日一日、今この時に生き抜けよ」

と仰ってくださいます。そういう生き方ができるんです。

私はこのキリストに触れるまではそれができなかった。本当に過去を悔いて、自分も嫌でしょうがなかった、悔いばかりで。それから、将来のことを思うと不安ばかり。過去の重荷、嫌さ加減、それから将来の不安、どちらも真つ暗。その二つの真つ暗に包まれると、現在はまだ真つ暗なんです。そういう生き方をして苦しんで悩んでいました。まあ思い詰める質たちだったのかもしれない。また、何でもことんやらないと気が済まない質だったのかもしれない。

若いときに罪の自覚、それから死の恐れ、この二つですね。そういったものに実はさいなまされていた。それはやがて自分の身体を蝕むしばんで、私は健康もすぐれなかった時期がずっと続きました。そういう谷間に在って、私は1956年に或る兄弟をとおしてキリストに導かれ、そして3年後に小池先生に出逢ったという次第なんです。そして、この小池先生はよく、

「祈ることとは何か。働くこと（ラボラーレ）が即ち祈りだよ」

と仰います。祈りとは三昧ではない。いつもキリストに自分自身を投げ入れて、キリストに包まれて、そして地上の一步一步を踏みしめ歩いていく。歩くことが、働くことが祈りなんだよと。今日一日をキリストと一緒に歩く。

「今日、汝、われと共に。パラダイスなり」

と、あの十字架上の盗賊に仰った言葉。それが先生の最愛の言葉だそうですが。そのような先生は毎日毎日、キリストと一緒に歩いておられます。



先生は、はっきり言つて、無教会出身なんです。無教会畑で育たれて、本当にその将来を嘱望^{しよくぼう}されておられたのが、御霊のバプテスマを受けられたら、それで無教会から放り出されてしまった。白眼視されて、

「小池は異端になった。変になった」

と言われた。また、無教会は昔から教会とは敵対関係にありましたから、教会からも無教会からも先生は白眼視されなされた時期があります。無教会は今はどうか知りませんが、とにかく、そういう中をキリストだけにすがって生きてこられた。その姿を私はまざまざと見ております。先生は本当にこの教育の場におきましてキリストだけを告白してゆかれました。

●永遠の生命の水

そういうことで、この永遠の生命の水というのは実は、この文化文明を底から担っているものなんです。花があります。その根っこが地下水に根を張ってそこから水を汲み上げて育つていく。先生は『無者キリスト』で書いておられます。

「宗教は根の世界である。見えない世界である。地下に埋もれていて見えない。これが宗教だ。しかしながら、樹木の幹は道德であり、花や実は芸術であつたり、その他文学、政治、経済、いろんな学問的営み、芸術的営み、それが花咲く。その花咲く樹木が真に健全であるためには、その根が深くなければならない。根は、方向は逆だ。片一方（幹）は天に向かって伸びていく。片一方（根）は下に向かっていく。限りなく祈りの世界で神さまに、深淵に入っていく。これ（幹）は上に向かっていく——まあバベルの塔ではありませんけれども——花ひらいて、人はその花を見ている。しかし実は根っこが大事だ。この根っこが腐っていると、いつか木は倒れる。」

そういうことを先生は言っておられます。

キリストの霊水をいただいた者が文化文明を支える。それがなければ、その文化文明はどんなに一時的に栄えていまして、必ず滅びていく。ローマも滅びましたし、権力もその他絢爛たる文化も、もしそれが根っこを持っていなかったら、必ず滅びていく。

そういうことがこの対話で出ていると思う。また、私たちはどんなに仕事に熱中したり、いろんな生きがいや地上で持つていまして、フツと空しくなることがありますか。女の方だつたら育児に専念している、学者は学問に打ち込んでいます。やっている時は本当に楽しいんですよ、キリストも何もないんですよ、本当に言いまして。だけど、それがあるとき終わつたとき、そのときに喜びと共にフツと空しさが出てきたりする。

それからまたそういった営みが毎日毎日延々と続きますと、なにか空しくなる。私は大学の助手の頃に、それを嫌というほど味わつた。学生時代におさらばを告げて、研究助手



に一人残った。研究室を一ついただいて、日曜日も出てきてずっと朝から晩までやっていました。それを続けていますと、なにかわびしくなってきた。私はその頃は、酒を飲むとか、他の娯楽も何も知らない身でありました。そしてもう本当にわびしくなってきた、

「なんで私はこんなことをしているのだろうか？」

と思った。そういうことで、みんな渴くんです。この世の仕事、この世の生きがい、いろんなことに携わっていますと、いつか渴く。疲れるんです。そんな時に本当に安らぎがほしい、永遠のものがほしい。それをキリストが、

「私がそれを持っている。いや、私の中に神さまが泉して湧いてくださっている。

私から流れていくんだよ」

と。キリストは神さまに完全に明け渡しておられるから。だから、キリストが泉になってくださる。それを先生は、

「^{むしや}無者」

と言っておられる。無私者、私無きひと。我執の無きひと、無我なるひと。罪無きひと。善も無きひと、無善者。何も無いひと、「神さまだけ」と言ってお生きていたひと。このキリストから流れていく。

キリストは、皆さんご承知のように、荒野での試みに遭われたですね。あれは聖霊を受けられてから、荒野に導かれて四十日四十夜、獣だけが住んでいるような所で試みに遭われた。四十日の断食を終えられたとき空腹を覚えられた。飢餓の状態です。その時に試みる者がやってきて、

「あなたが神の子ならば、この石をパンに変えてごらん」

と。有名なところですね。キリストは、

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉によって生きる」

と。飢餓のどん底ですよ。もう少し続けば命はないかもしれない。そういうどん底で、肉体の限界をつぶさに味わわれた。

「人が生きるのはパンだけではない。神の口から出る一つ一つの言葉、神の言葉

神の言葉に霊があります、神の霊がこもっています。神の言葉が霊となって火花する。その人の中で泉するんです。

それで私は生きている」

と。生命も何もかも全部、キリストは神さまに差し出しておられる。もうあそこから、キリストの献げは始まっている。あのゲッセマネを通して十字架に至るまで完全に、

「父よ、^{みこころ}汝の御意を。あなたの^{みこころ}聖意だけが私の食物です」

と、このあとに出てくる。

「神の御意を為しとげることがわが食物である」



と。その貫きのキリスト、そういうお方でございます。
神さまは我々に生命の水を下さる。この生命の水は、実は創造的な力を与えていきます。万物は神さまの創造に成っているんです、この大自然も。みんな神の作品なんです。実はヤコブよりも、キリストは先におられた。

「アブラハムより我は前さきにあるなり」

と、ヨハネ伝に書いてある。霊なるキリストが神の聖座にいらつしやつた。それが受肉して地にくだって来られた。我々罪びとと関わりを持って、我々を救わんがために、我々を天の生命に満たすためにくだって来られた。

●足を洗う

実は昨日、大和屋旅館での集会で小池先生は「足を洗う」というヨハネ伝のお話をしてくださった。有名なあの最後の晩餐のところで、夕餉ゆうげのあと弟子たちの足を一人一人洗われた。あの時代は裸足はだしで歩いていきますから、一番きたない僕の仕事です。奴隷のする仕事をキリストは、フツと思ひ立ってなさつた。手拭いを腰にまとして、盥たらひに水を汲んで、一人一人の足を洗われた。奴隷の仕事をなさつた。

キリストは馬槽うまぶねに生まれられた、どん底の生まれ方をなさつた。そして今、最後にまた奴隷の仕事をなさつた。キリストこそは神の僕しもべ、本当に僕の姿です。その僕の姿は、神さまの僕である方は、人の僕にまたなられた。徹底的などん底の姿になられた。そして足を洗われた。ペテロは

「私は洗ってもらうのは要りません、畏れ多いから」

と。そうするとキリストは、

「もし、私がお前の足を洗わなかったら、お前と私はもう関わりはないよ」

と仰つた。小池先生は、

「キリストとの関わりはどうしてできるのか。我々が清くなって、我々がキリストに近づいて来てできるのか。そうじゃない。キリストが天から降くだつてきて、我々の足の泥んこを洗って、関わってください初めてできたんだ。キリストは足を洗うために、関わりを持ったために、この世に降つて来られた。それ以外にキリストの来られた目的はないんだ」

と、言い切られた。これが福音であります。本当にこちらの立派さではない。こちらの善さではない。こちらの立派さで天国へ行けるなら、たくさんの人が天国へ行つてます。キリストが来ることは要りません。天上で微笑んでおられたらよかったんです。それでも、

「義人なし、一人だになし」

と。誰もおのが悟りで、おのが善行で、おのが信仰で救われない。そういう罪と死に氣息えん奄々たる、そういう現世にキリストは降つて来てくださった。足を洗ってくださいました。



「足を洗うために来たんだよ、お前は要らんのか!？」

「はい、洗ってください!」

とペテロは本当に平伏してキリストに言いました。そういう関わり方です。

こういうキリストをいただきますと、私たちは本当に神の霊に貫かれて、私たちは甦っていきます。キリストの霊が私たちに宿りますと、本当に私たちは甦っていきます。

私は小池先生に出会って一番うれしいのは何かといいますと、先生は「無条件」と仰った。

「無条件だよ」

と言ってくださいました。そして、

「破れだよ」

と言ってくださいました。

「整ったものはろくなものはない。整ったものは立派に見えるだけだ。しかし、そんなものに生命はない。破れている姿に神の光が宿る。いいかつこをしなくていい。でき損^{そこ}ないのまま、破れたまま、それでキリストのところへ来なさい」

と、そう言ってくださいました。

これは一番ありがたい。先生は「無」ということを本当に仰いました。これからまた、

「聖書はドラマである」

というお話で出てくると思いますけれども。無条件でキリストが与えようとしてくださっているものを、無条件で「はいっ」といただく。それだけだと。

この女にだって、キリストは何も条件を付けておられない。

「もし、あなたが神の賜物^{たまもの}を知り、また『水を飲ませてください』と言った人が誰であるかを知っているなら、あなたのほうから願い出たことであらう」

と。これはキリストに出会っているんですけれども、どなたかわからないですからね。だけれども、

「もし、ここに立っている方がどなたであり、神さまは何を下さろうとしているか、そのことをもし知ったら、あなたのほうから願い出ただろう。そしたら、その人はあなたに活ける水を与えたよ」

と、それだけです。「願い出たら与えたよ」と言ってくださいる。本当に有り難いですよね。

●十字架の蔭に泉湧きて

これはヤコブの泉をとおしてお話ですけれども、本当の霊の泉はどこに湧いているか。どこに湧いているか。それは十字架という場に湧いています。十字架という場がこの泉の湧く場なんです。

泉は清いでしょ。人を生かすこのヤコブの井戸も実に清澄な水が滾々^{こんこん}と湧いている。清らかな水、それはどこに湧いているか。無色透明の水はどこに湧いているか。それはキリス



トの十字架の場、十字架でもってキリストはご自分を砕かれた。神さまに砕かれた。審かされた。私の罪を背負って、私のこの我執を背負って、私の呻きを背負って、十字架で砕かれ給うた。十字架でキリスト自身が砕かれ、私がそこに共に砕かれ、キリストも私もみな無くなつた。そこに真清水が湧いた。キリストは復活せしめられて、新しい霊体となつて顕れ給うた。もはやそこに死もない、悲しみもない、新しい生命が燦然と輝いている。復活の朝です。そのキリストが天界に昇られて、弟子たちに

「お前たち、祈っておれ。やがて聖霊、助け主がくだって来る。この助け主が来たならば、お前たちは力を受けて、世の終りまで地の極までわが証人となれ」

と言われた。それが五旬節、ペンテコステ、聖霊降臨節で成就しました。その聖霊が実は泉なんです。泉の水なんです。湧く場は十字架であり、湧いている泉は聖霊だつたんです。聖歌（396番）の1節に、

「十字架の蔭に泉湧きて、

いかなる罪もきよめつくす。

おらせ給え、この身を主よ、

十字架の蔭にとこしえまで。」

という歌詞がある。

皆さん、無条件だと言いますと、

「いやあ、私のような汚れた者が」

と仰るかもしれません。そういう「私のような者が」というのが全部、十字架で片付けられているんです。さっきの「足を洗う」という、どろんこを洗ってくださった、それが十字架なんです。十字架の血が一切を清めてしまっている。

「もはや、汝は清し、罪なし。私が一切を片付けた。今は祈っていないさい。聖霊を上げるから。この生命の水を上げるから」

と。これが無条件の恵みです。無条件に受けとる人に無条件に下さる。これが聖霊の水なんです。その聖霊が光を発します。

●詩篇36篇9節「生命の泉」

小池先生が今度、『詩篇珠玉集』（小池辰雄著作集第四巻、1980年刊）を出されました。その一節に詩篇36篇というのが選ばれております。この『詩篇珠玉集』は、一番新しい「キリスト新聞」の6月7日号に、神学者の「日本ルーテル神学大学教授、日本聖書協会理事」の岸千年先生という方が言葉を尽くして激賞しておられます。「こんな素晴らしい詩篇は初めてだ。実に小池先生の特徴が表れている」と。

「日本語で書かれた詩篇研究で、この書物ほど学問的でありつつ、通俗的であり、かつまた魂をゆさぶる感動を与えるものは、他にはないと思つ。」（書評「魂をゆさぶる講解」）



——詩篇五十篇を選び出し、個性的に楽しく

という書評の結びで語っていらつしやる、そういう書物ですけれども。その36篇——先生は原典から直接訳しておられる——その中にこういう一節がある。

5(6) エホバよ、あなたの愛憐は天に漲り

あなたの信実まことは雲にまで及ぶ。……

7(8) あなたの愛憐は貴い哉、ああ神よ！

人の子はあなたの翼の陰に寄り添う！

8(9) 彼らは汝が家の脂あぶらで飽き足り、

あなたは汝が愉楽たのしみの流水ながれを彼らに飲ましめ給う。

9(10) そは生命いのちの泉はあなたの許もとにあり、

あなたの光の中でこそ我らは光を見るから。

こんな素晴らしい句があります。それから、もう一つ、ヨハネ伝の中にあります。これはもう少しあとにいたしましょう。この「生命の泉」の中に私たちが浴する道はただ無条件に、己自身があるがまま、キリストの中に投げ入れる。祈りでもって投げ入れる。それだけだと。これが私が先生から賜った福音です。

●我キリストと偕に十字架せられたり

ガラテヤ書2章20節に、

「我キリストと偕ともに十字架せられたり。最早もはやわれ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生き給うなり」

と。御霊のキリストが私の中に生きてくださっている。そういう現実が必ずやつて参ります。私は長いこと悩んできましたから、そしてまた信仰の道に入ってから、

「聖霊がほしい、聖霊がほしい」

と思ひながら、十数年悩んできましたから、今はつきりと皆さんどなたにでも証言できます。必ず主は下さる。必ず上から降くだつてきて貫いてくださる。そして今度は、その人を通して流れていくんです、この泉は。必ず流れていく。

総じて、キリストのところへ来る人はどういう人かと。これはさきほどコリント書簡を読んでいたいただきましたけれども、パウロはよく書いてくれましたよ。私は大学という賢い人ばかりの集まりの中におりますと、このパウロの言葉で慰められます。まず教室でキリストのことを言いますと、みなニヤニヤと横を見合わせてザワザワザワとして、「なんだ、キリストか」というような感じなんですよ。『なんと意気地なし、神にすぎるなんて』と、そういうふうなことで、みんな頭がいいですから。「私はバカだ」と言っているんです、

「私のようなバカに教えてもらっていて、申し訳ない」

と言っている。だけど、パウロは言ってくれた。第1章26節から、



「²⁶兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる^{かしこ}智き者おおからず、肉によれる」というのは「生まれながらの」ということ。

能力^{ちから}ある者おおからず、貴きもの多からず。²⁷されど神は智き者を辱しめんとて世の愚^{おろか}なる者を選び、強き者を辱しめんとて弱き者を選び、²⁸有る者を亡さんとて世の卑^{いや}しきもの、軽んぜらるる者、すなわち無きが如き者を選び給えり。」（コリント前1・26～28）

つまり、この世で見捨てられた者、この世で渴いている者、この世で行き詰まっている者、悲しんでいる者、そういう者をキリストは探し求めて出会ってくださる。このサマリヤの女は実は渴いていたんですよ、魂が。彼女は身持ちもわるかった。だけれども、何か魂で求めていた。それを知って、神さまのほうから近づいて来てくださった。私はそう思います。

「恵^{さいわい}福なるかな、悲しめる者、その人は慰められん」

という山上のキリストの言葉があります。この地上で幸福の絶頂にある方、事業が成功して得意満面な方、いろんなそれぞれのお仕事で調子よく行っている人はあまりキリストのところに来ようとはしない。滑ったり転んだり躓いたり、挫折したり、病に倒れたり、命を懸けてきたものに裏切られたり、何かそういう本当にもうどこへも持っていきようないような、その悲しみと言いますか、もう焼け酒飲んでもなおどうにもならんといった、そんな魂に実は「山上の垂訓」のあの言葉が——「垂訓」ではない——キリストの呼びかけ（告白）なんです。

「さいわいだよ、お前。私がお前の友ではないか。私はお前と関わりを持ちたいんだよ。今、この言葉が聞こえるね」

と、そう言って語ってくるのがあの山上の言葉です。だから、本当に谷間で聴くべき言葉ですね。そしてその時に聴いた言葉はいつまでも離れないんです。

だから一切、この神さまは公平な方です。この世で見捨てられた者、この世でうまくいかない者、そういう者にいつも豊かな慰めを下さる。

このコリント前書第2章では、この世の智者に対してパウロは開き直っています。自分はコリントへ行くとき、実にアテネで失敗いたしましたして、智者が集まっているアテネでパウロは論陣を張ったけれども、みな聴いてくれなかった。それですっかり自信を喪失して、大阪のような商売の町コリントへ出掛けるとき、もう破れかぶれ、

「キリストだけ。御霊のキリスト、十字架せられ給いしままのキリスト。もうそれ以外何も知らん」

と。これを引っ提げて行っただけです。

「⁴わが談話も、宣教も、智慧の美しき言によらずして、御霊と能力^{ちから}との証明によりたり。⁵これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼^よらん為なり。」（コリント前2・4～5）



はつきりとこの世の文化文明に訣別しました。「神の言と神の力で」と言つて、そしてコリントに教会ができました。だけど、実は「神の智慧は深いんだよ」と、6節から書いてます。「人はこちらを知らない。しかし、こちらは神さまに知られ、一切を見る光が与えられる。人に知られていないようで、実はその人は神に知られ、神によつて輝いている。倒されぶつ倒されているようで、実は神さまは立たせてくださっている。弱いようで、実は強いんだ、誰よりも強いんだ」

と。そういうことをパウロはコリント書の中で随所に書いてくれています。だから、このパウロという器は、私たちにとつて本当に励ましであります。

●永遠の生命をいただく

ヨハネ伝の、さきほどちよつと申しましたが、7章を見ます。37節から、

「³⁷祭りが最も盛大に祝われる終わりの日に、イエスは立ち上がつて大声で言われた。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。³⁸わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となつて流れ出るようになる。」³⁹イエスは、御自分を信じる人々が受けようとしている『霊』について言われたのである。」（ヨハネ7・37～39）

はつきりとここで、

「その人の中から生ける水の川が豊かに流れ出ていく」

と。キリストは生命の泉でした。みんなにその泉を差し出して、水を飲ましてくださった。

「その水を飲んだ者は死なない。永遠の生命をいただく」

と。本当に死なない。キリストのように羽ばたいて天界に行きます。のみならず、この地上でその人自身が今度は泉とされる。そして、苦しんでいる人や困っている人に流れて行く。本当に流れていくんです。

私は、小池先生が来てくださると、何か向こうからずうつと流れてくるものを感じまして、少々疲れていても、先生のそばに居ると自然に元氣になつてしまふ。不思議なんです。やはりそういう存在と言いますかね——先生は76歳ですけれども——それは大変なエネルギーです。先生は、

「全部、上から流れてくる。君たち、疲れるかね。それは自分の力でやるからだよ。神さまから流れてくる力でやったら、絶対に疲れない」

と、はつきりと言われます。

最後に、ヨハネの黙示録というところにまたこの「泉」のことが出てきますので、最後の世界をヨハネが幻で示されたところですが、21章1節から読んでみます。

「我また新しき天と新しき地とを見たり。これ前の天と前の地とは過ぎ去り、海も亦なきなり。²我また聖なる都、新しきエルサレムの、夫のために飾りたる



新婦のごとく準備して、神の許をいで、天より降るを見たり。³ また大なる声の御座より出づるを聞けり。曰く『視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に住み、人、神の民となり、神みずから人と偕に在して、⁴ かれらの目の涙をことごとく拭い去り給わん。今よりのち死もなく、悲歎も号叫も苦痛もなかるべし。前のものに過ぎ去りたればなり』⁵ かくて御座に坐し給ふもの言いたもう『視よ、われ一切のものを新にするなり』また言いたもう『書き記せ、これらの言は信すべきなり、真なり』⁶ また我に言いたもう『事すでに成れり、我はアルパなり、オメガなり、始まり、終わり、終なり、渇く者には価なくして生命の水の泉より飲むことを許さん。⁷ 勝を得る者は此等のものを嗣がん、我はその神となり、彼は我が子とならん。』（黙示録21・1〜7）

こういう終末の世界が描かれています。これは最後の世界ではありませんけれども、実はこういう世界を私たちは味わっています。はつきり言いまして、こういう世界が今、私たちの中に既に泉して湧いています。それがやがてかの日に完成しますけれども。本当にそうなんです。私たちは、地上では戦いがあります、涙があります。苦しみがあります。しかし、その中であつて実にこのキラキラ輝いているものをキリストは下さっています。

私たちは本当に何者でもありません。どの派にも属しません。ただ私たちはこの新約聖書が証言しているこの福音の現実、使徒行伝、そして使徒たちの書簡、そういったところに溢れているこの聖霊の現実。ユダヤ人も異邦人もない、男も女もない、奴隷も自主もない。人はみな神の子だと。神さまは救おうとしてなさっている。そういう尊い器です。この一人ひとりに神さまはキリストという宝を一人ひとりの中に与えようとして呻いておられる。

「御霊言い難き呻きをもて執り成し給うなり」

と。天界のキリストはご自分の霊を聖霊という姿で私たちに送ってくださいました。そのお方が天界のことを教えてくださいださる。

「御霊をいただいたら、誰にも教えてもらわなくても、御霊自身が教える」

と書いてあります。それがパウロが「霊、霊」と言っている、そういった事態なんです。キリストも、

「神は霊だ。礼拝する人も霊と真をもつて拝しなさい。この山でもあの山でもない。

エルサレムでもゲリジブの山でもない。」

「霊と真をもつて。あなたがいるお台所が礼拝の場だ。あなたがいる働いている場が礼拝の場だ。そこで『主さま！』と祈りながら、キリストに全托して、そして歩いているところ、そこにキリストの御霊が臨み、あなたと一緒に旅してください。」と。こういった現実が、私は本当に真正正銘、皆さんに告白したい現実なんです。

時間も参りましたので、これで終らせていただきます。どうも、有り難うございます。

